

# 鈴木大弓

注目作家

2022年12月

## 鈴木大弓独占インタビュー

12月2日から開催の個展に向けて伝統を守りながらも洗練された技術で新しい器を表現し続ける鈴木大弓さんを独占インタビューしました。韓国での修行秘話や今後の展望などを聞きました。



# 桃青



## 鈴木大弓 (すずき ひろゆみ)

- |        |   |
|--------|---|
| 1981 年 | 仙台市にて生まれる                                 |
| 2005 年 | 韓国、聞慶および慶州にて修行                            |
| 2009 年 | 信楽にて独立                                    |
| 2010 年 | ギャラリー陶園 <信楽> にて初個展<br>現代陶芸サロン桃青 <大阪> にて個展 |
| 2011 年 | 穴窯陶廊炎色野 <東京> にて個展                         |
| 2012 年 | 名古屋三越栄店美術サロンにて個展                          |
| 2013 年 | 横浜高島屋美術工芸サロンにて個展                          |
| 2016 年 | 伊賀に工房を移転<br>銀座黒田陶苑にて個展                    |

### ■陶芸を始められたきっかけを教えてください。

大学は上京して、美術系ではなく普通の4年生の大学に通っていました。初めの1、2年は沢山遊んで、あっという間にすぎてしまったんで、ちゃんとした学生生活がしたいなと思い陶芸サークルに入ったのがきっかけです。何で陶芸だったのかは分からないですね(笑)

後で分かった事ですが、そこからプロになった先輩の作家さんが13人程いるような割としっかりしたサークルでした。

### ■韓国で修行をされたきっかけと、韓国でのエピソードを教えてください。

陶芸家になる事に対し親から猛反対されたのがきっかけですね。親としては4年制の大学をでている僕にちゃんと就職をしてほしかったんですね。両親から“海外に行つてまでやる根性があるなら、弟子入り先が海外ならば認める”と言われたので、ならば行くしかないという感じでした。もともと井戸茶碗の何とも言えないカッコよさに惹かれていたので修行先は韓国に決めました。

韓国に知り合いがいた訳でもコネあがった訳がないので、とりあえずソウルの語学学校に通いながらギャラリーや茶道具屋さんを片っ端から回つて弟子入り先を探しました。今思えば若かったんですね(笑)

いろいろ回っている中で、他の作家さんにはない形やバランス感覚をもった作品に出会えたので、お願いをして何とか最初の弟子入り先が決まりました。ただ趣味でリンゴの木を一万本程育てているおじいさんだったので、リンゴの木の世話をしている時間が長かったんです(笑) 僕が韓国人でビザなしに無期限にいられるのなら、“これぞ弟子入り”みたいな感じでよかったですけれども、時間の制限がある僕はどうしても陶芸に専念して修行をする必要があったので辛かったですね。悩んだ結果、弟子入り先を変える決意をしました。ちょうどその時に一緒に修行をしていた兄弟子から“鈴木は轆轤をやれ”と言われ新しい先生を紹介してもらいました。

新しい先生は当時36歳くらいの若い先生だったのですが、韓国は轆轤がすごく有名で轆轤技能大会いわゆる轆轤のオリンピックのようなものがあり、その大会で1、2位を争うような方でした。轆轤の修行はまず5キロの土のかたまりから壺をつくれ、とって始まって、それが20キロまで続きました。日本だったら湯呑とか飯碗というところからスタートするのに、いきなり壺からってというのは面白かったですね。ろくろの引き方は多少変わったところもありますが、ほとんど当時のままです。

# 桃青

あとは釉薬の作り方も韓国に行く前までは市販のものを何グラムずつ混ぜるというやり方しか知らなかったんですけど、韓国では今までまったく知らなかった手法や原料で釉薬をつくる方法を学びました。今でも韓国から送ってもらった原料を使う事もあります。



(写真:鈴木さんが使用する轆轤)

## ■韓国語の方は？

韓国語は今使わないので、鈍ってしまいましたが、当時は最終的には話せるようになりましたね。

## ■帰国後、信楽で活動を始められたのはどうしてですか？

帰国後は美濃や唐津の方も回った後、学生時代にきたことがあった信楽へ澤清嗣さんを尋ねて行きました。そこで澤克典さんを紹介してもらって“こっちにおいでよ”と言われたのがきっかけです。克典さんには今もすごく良くしてもらってますね。今の伊賀の工房も克典さんに紹介してもらいました。

## ■いろいろな分野を手掛けておられますが一番やりがいがあるのはどれですか？

昔から三島、粉引、信楽はやっているのでそれはこれからもずっと続けていくつもりですけど、今は特に粉引の釉薬や化粧土のテストをしていて、それはすごく楽しいですね。

粉引きの難しいところは、化粧、赤土など土の相性を合わせるのももちろんですが、器がどのように育っていくのか、使っていくうちにどう汚れていくかを考えるところです。陶器は使うと育つものなので、使っていると白く見えても、初めの色からは変化していきます。ただただ汚れていくのではだめですし、どうやったら美しく変化していくのか、それを考えながら作るのはとても楽しいですね。

## ■作品にはどのような思いを込められていますか？

使って頂く中で育っていく器を作れたらと思っています。形はあまり主張しないでいいかなって思っています。

“ぼん”ってあるけど、普段は気にもとめないような感じ。でもなくなるとなんか寂しいなっていう、飽きられないものを作りたい。花器でも器でもそれは同じですね。

ただ焼き締めはその反対ですよ。伊賀なんか、“ザ伊賀”みたいな、ごりごりして筋が入りまくった目立ったものを作っていますね。李朝系は静かな感じで、焼き締めではそのストレスをぶつける感じですね。

## ■作陶していて悩まれる事はありますか？

常に悩んでいますよ。毎年同じ場所で展示をするとなると去年よりも少しでも変化を見せないとギャラリーにも来てくれるお客様にも失礼なので、毎回どう変化を見せるかというのは悩みますね。

# 桃青

目立たないように釉薬をかえたり、形を変えたり、去年は皿しか作ってなかった作品で茶碗を作ってみるとかですかね。今はまだ途中経過なのでその中で最終的によくなればいいと思っているので、その過程になるものは全てやっていきたいと思っています。楽観的に、考え込むよりとことん作った方がいいかなって思っています。

## ■それぞれのどのような土を使われていますか？

信楽、伊賀、青磁は信楽にいた時にかぼつと土屋さんから買った白土を使っていますね。山から掘ったものをそのままとってもらっている感じですね。志野は山口真人さんと一緒に美濃の土を掘りに行っています。粉引や三島は伊賀と信楽の間の山の赤土を自分で掘って、使っています。話は少しずれますが、今は兄弟子の繋がり韓国語の子が修行に来てくれていて、土を掘るのや窯炊きを手伝ってもらっています。はじめ来てくれた時は韓国語を使ってコミュニケーションをとっていましたが、それだと日本語を全然覚えられないので、彼の為を思い分らなくても日本語を使うようにしたら今は立派な通訳になりましたよ(笑)

## ■製造方法について教えてください。

基本的には轆轤、あとは手びねり轆轤といって粘土の紐を積んでいって最後形を整える時に轆轤を回して整える手法です。窯は穴窯、電気窯二つ、灯油窯、倒炎式の薪窯と全部で5つあります。志野や飴釉などは電気ですが、それ以外は還元度合が強くなり色の深みが出るので、焼き締めはもちろんのこと、青磁、三島、粉引、黒高麗などは全て薪窯を使うようにしています。ただ頼まれてどうしても急ぎで完成させなければいけないものなどは、電気や灯油を使いますね。伊賀、信楽で良く見られる薪窯のサイズは3.0-3.5mくらいなのですが僕が使う薪窯は5.5mで横から薪をくべるスペースがあるほど、普通のものよりもかなり大きいです。作品の種類にもよりますが1000個は普通に入ってしまう程です。大きい理由は窯をつくっている途中で雨が降って途中まで作っていた窯が水没しちゃったんです。一からやり直しになって腹が立ったので大きくなりました(笑) 大きい分本焼きの時間も4日半から5日と長めで、薪も300から330セットほど使います。素焼きはするものとしらないものがありますが直接薪窯の床に触れるものは床の湿り気で割れてしまうのを避ける為、素焼きをします。壺や花器などの大きな作品が多いですね。



(写真:鈴木大弓さんの穴窯)

## ■昔と今で変わったことはありますか？

昔はほんとに何をつくるにも轆轤ばかりでした。でも今は轆轤もするし、たたかもするし、技術の面でもひろがったかなと思います。

三島に関していえば、昔は、伝統的な丸い形の器にひたすら模様をつけていくばかりでしたが、今は陶箱とか四角いものに判子を押し作ったり新しい形で三島を表現できるようになりました。判子は自分で木を彫ってつくっているものもありますし、韓国のお菓子の型をそのまま使っているものもあります。

# 桃青



(写真: 手彫りの判子)



(写真:判子が置かれた棚)

精神面いうと、昔は展示会前はお腹壊すし寝られないしと大変でした。でも今は寝ないと仕事できないし開き直れるようになりました。いい意味で(笑) もちろん精一杯やりますが、今はまだまだ途中経過だっと思えるようになりました。

## ■今後挑戦していきたいことは

今まで信楽だと壺、花入とかだけでしたが、変わったものを作りたいなと思っています。ただただ塊を焼くとか、土を焼いてなにかとくっ付けたとか、手水鉢のような無駄に重いものとか、誰もいらないだろうってものとかですね。ちょっと遊び心があるものをつくれたらなと思っています。

鈴木大弓さんの個展は2022年12月2日(金)から12月24(土)まで開催中です。

皆様のご来廊お待ちしております。